

Ordinary Personology

In The Handbook of Social Psychology (4th Ed.), vol 2, pp.89-150.
Chapter 20. Daniel T. Gilbert (1996)

報告者:小森めぐみ

I.	BRUNSWICK'S CHILDREN: THE ROOTS OF ORDINARY PERSONOLOGY p.89
	i. The Objective Approach	ii. The Logical Approach
II.	HEIDER'S CHILDREN: THE LOGIC OF ORDINARY PERSONOLOGY p.94
	i. The Naïve Psychology	ii. A Theory of Correspondent Inferences
	iii. A Theory of Causal Attribution	
III.	ASCH'S CHILDREN; THE PROCESS OF ORDINARY PERSONOLOGY p.102
	i. The Social Cognitive Tradition	ii. Operating Sequence
	iii. Operating Characteristics	iv. Content Matters
	v. The Next Tradition	
IV.	ICHHEISER'S CHILDREN: ERRORS IN ORDINARY PERSONOLOGY p.120
	i. Sources of Error in Ordinary Personology	
V.	THE FUNDAMENTAL ERROR OF ORDINARY PERSONOLOGY p.127
	i. A Critique of Pure Error	ii. Errors in Perspective
VI.	OUR CHILDREN: THE FUTURE OF ORDINARY PERSONOLOGY p.140

本章では、他者のある状況における状態(情動、意志、欲望)や、状況によって変わらない傾向性(信念、特性、能力)を、一般の人々が知るようになる過程を指して、ordinary personology と呼ぶ(以下 OP 研究)。

I. BRUNSWICK の子供たち:OP のルーツ

I-i. 客観的アプローチ

初期の社会心理学者達は、感情を、物と同じように実在するものとして考えていた。

“人の対象理解の正確さ=対象の客観的測定値-対象に関する主観的な評定値”

レンズモデル(Brunswick, 1947)

物理的刺激的の属性は、視覚的情報として調整され、それが主体に受け入れられた場合、解釈されたり、されなかったりする。例:幸せだ→微笑→微笑を見る→“幸せそう”

☆知覚されたものと本物とをはかっている測度を比較すれば、判断の正確さが分かる

⇒レンズモデルに従って、1940年代は相手をどのくらい正しく理解できるかという研究が興隆

Bruner & Taguri (1954) Cronbach (1955), (1958)などによる問題点の指摘

I-i-a. 結論の出ない結果 手法、参加者、時期などで知見が一貫せず、大きな結論に至ることができない

I-i-b. 曖昧な対象 研究対象となっているパーソナリティなどの定義や測定方法がはっきりしなかった

I-i-c. 理論の欠如 個々の知見を包括するような理論がないままに、研究の数だけが増えていった

I-i-d. 不当な計算方法(*)ターゲットの自己評定から他者による評定を引くことで正確さを測ることは不適切

I-ii. 論理的アプローチ

1957年 ハーバード大でのカンファレンスで OP 研究は論理的アプローチへの転機を迎える

☆how well から how への転換(Bruner & Tagiuri, 1954)

I-ii-a. 新しい方法論 Asch(1946) 形容詞を順番を変えて読み上げ、印象形成をさせる。

→印象形成における法則性(先の情報が後の情報を構造化する)を発見

☆架空の人物を使用することによって、①実際の人物を使用した際の複雑性を排除

②正誤ではなく、条件による印象形成の違いの法則性を重視

I-ii-b. 新しい基準

Heider(1944) 人が他人の行動から相手を理解する方法は、物の動きや外見からそれを理解する方法と同じ人間の行動の原因理解を支配する法則を記述することを目的とする。法則に従った場合が“正しい”

I-ii-c. 新しい協定

二人の研究は新しい方法論、理論を呈示、OP 研究は新しい目標、方向性、運命を獲得

客観的アプローチ: ターゲット自身の評定と他者の評定の比較して正確さを検討

論理的アプローチ: 法則に従った場合の判断と実際の判断の違いを検討

☆論理的アプローチは、推論の法則システムの理論的發展研究(→次章)と、法則一致/不一致行動の研究(→IV 章)にわけられ、批判を受けつつも、現在の OP 研究に影響を与え続けている。

II. HEIDER の子供たち: OP のロジック

II-i. 素朴な心理学

現在の OP 研究は、Heider の考え方を理論的に拡張したり、実験的に検証したもの cf. 哲学における Aristotle

II-i-a. Heider の考えの中心

Heider の考えは、5 つの特徴を持っている(Heider, 1958)

- ①人間には環境に応じて変わったりしない心理的特徴 (disposition)があり、行動はその表れに過ぎない。
更に、行動がその人の傾向性を表すといっても、その関係の法則性は単純ではない
- ②人間は行動から不変なもの (invariable) を抽出する
(←くりだす) ことによって、他者を理解する
- ③帰属によって他者の傾向性を理解することは、リアリティの把握、予測、統制につながり、必須のもの
- ④帰属、知覚に使われる法則は意識しないで使われる傾向にある
- ⑤行動は環境と人の傾向性の産物だが、帰属システムは行動を一時的な原因と持続的原因の組み合わせの産物と考え、そこから人の傾向性を抽出する(Fig.1 参照)

II-ii. 対応推論理論

Jones 複雑すぎる Heider の理論を再定義。実証的な研究につながる理解可能な心理学の理論を構築

対応推論理論(Jones & Davis, 1965)

“対人認知の基本的課題は、ある行動の因果関係を解釈、推論すること” ←Heider と同じ前提
行為の目的、意図の推論のしかたを特に取り上げる
人は、他人が何をしているのかをどのように推論するのか? その情報によって何がわかるようになるのか?
→判断のもたらすユニークな結果の数と望ましさから説明

II-ii-a. 意図の同定

人の選択の意図や理由を考えるときには、それぞれの選択肢が他と違うところ(非共通効果)が考慮される
それが多い場合には、その特徴の社会的望ましさが考慮される

II-ii-b. 傾向性推論

OP の目的 Heider: 意図を明らかにすること Jones
達: 意図の中で弁別的な部分を知ること(対応推論)

II-ii-c. Jones and Davis の考えの中心

- ① 行為者の選択は、選ばれた選択肢の非共通な部分と共変し、そこからその人の意図が明らかになる
- ② 非共通効果が複数ある場合には、そこから行為者の意図を明らかにすることはできない
- ③ 他の人が選ぶであろう選択肢との共変を見ることで、その人の非凡な傾向性を明らかにすることもできる

(Fig.2 参照)

II-iii. 原因帰属理論

Kelly は、OP の法則は原因帰属(causal analysis)の特別なケースだと主張し、その類推の方法を示すことで、科学者が科学を研究するのと同じように、OP が行われていることを示した(Kelly, 1967, 1971a, 1971b)

II-iii-a. Kelly の考えの中心 Kelly の理論は Jones らの理論を因果関係

から捉えなおして、一貫性を加えたもの

知覚の主観的妥当性は、3つの推論テスト(弁別性/一貫性/合意性)によって確かめることができる。

① 他者の行為を推論テストにかける場合、問題になるのは行為の持続性、広さ、独自性である。これらと行為の共変を調べることによって、行為者の傾向性がわかる。

② 行為と各効果との共変が複数ある場合には、因果関係は特定できない
(割引原理)

II-iii-b. 状況帰属

行為の原因枠組み Heider: 個人/状況

Kelly: 内的/外的(平凡な傾向性含む)

II-iii-c. a なじみのあるメタファー

- ❖ Kelly のモデルは因果の推論の性質を理論化する基盤となり続けているし、そこに書かれている原理を使えば、様々な理論(Jones & Davis, 1965; Bem, 1967; Schachter & Singer, 1962)を再記述することが可能
- ❖ Kelly のモデルは、それまでに社会心理学者が馴染み深かった言葉を使って、シンプルに OP の仕組みを説明している点でも優れている。

III. ASCH の子供たち:OP の過程

- ❖ Asch は OP のプロセスに注目し、人がわずかな手がかりから全体の印象を組み立てることを、印象形成の研究を通して示し、その方法に従った研究が進んだ(e.g., Anderson & Jacobson, 1964; Hendrick & Constantini, 1970; Hamilton & Zanna, 1974; Anderson, 1974)
- ❖ しかし、研究によって明らかになったのは OP の過程(物事が起きる理由を説明する中間段階)ではなく、刺激と反応の関係を記述した法則(一般的に生じる物事の要約で特定の出来事から演繹される)のみ

III-i. 社会的認知の伝統

1970年代になると、認知心理学の影響から社会的認知という研究の新しい伝統が生まれる

- 心理過程とその過程によって生み出された心的表象の記述を目的とする
- 内的妥当性、正確さ、統制を重視 (外的妥当性、現実的リアリズムは犠牲となる)
- 社会的認知の枠組みは物の認知を説明する言葉で説明が可能と考える

☆これらの考えに従って、法則の発見→ブラックボックスの中で何が起きているかを調べることに研究がシフト

III-ii. Operating Sequence

認知的アプローチ:処理過程の情報の受理→変換→伝達 という

一連の心的操作として心的現象を捉える

(e.g., Broadbent, 1958; Miller, Galanter & Pribram, 1960)

操作の段階は3つ(同定、帰属、統合)に分けられる(Fig. 4)

III-ii-a. 同定 観察者が行動を同定する過程

帰属モデル:行動→傾向性の推論過程 そもそもどうやって行動を一定の意味あるものとしてとらえるか?

- ❖ 人は心的表象によって行動を意味あるものとして切り取ることが知られている(Newston, 1973)が、切り取った後も行動は複数の意味をもつものとしてとらえられる(例. 顔の筋肉を引き締める、笑う、ごまをする)

この分野の研究は、どのような過程だとどの意味で行動が捉えられるかを検討

- ①観察者は行為を行為者の意図から同定する
- ②行為者の意図は曖昧である場合が多いが、観察者は曖昧さを解明する
- ③観察者は行為を(対応する/しない)特性で同定 ←社会的認知の知見で最も頑健(e.g., Srull & Wyer, 1989)

III-ii-b. 帰属 観察者が同定した行動から傾向性を推論する過程

- ①帰属過程は二つの下位過程(傾向性帰属/状況帰属)から成る

Quattrone (1982)

帰属を実行する心的操作の流れを係留と調整のメカニズム(Tversky & Kahneman, 1974)を使って説明
帰属はまず行為に対応する傾向性が推論され、そこから状況の影響が考慮され、調整が起きる

- ②同定過程と帰属過程は互いに影響しあっている

Trope (1986)

行為者の以前の行動と現在の状況に関する観察者の知識という要因によって両方の過程を説明(Fig. 6)
二つの要因はどちらも行為同定過程には加法的に働くが、状況に関する知識は傾向性推論を割り引く

III-ii-c. 統合 観察者が推論した傾向性から印象を形成する過程

帰属によって形成された傾向性はどのようにして統合され印象となるのか?

- ①特性から印象が導かれる場合 観察者が傾向性を統合して印象形成
 - ②行動から印象が導かれる場合 同定なし、帰属は最小限で直接統合へ
- ☆統合過程は記憶内にある印象の表象の研究と密接につながっている

(see Smith, 1998; Wegner & Bargh, 1998)

特徴①印象は整合性を保つ

- ❖ その際使われる相互関連する傾向性に関する知識が暗黙の性格理論(Schneider, 1973; Wishner, 1960)。
- ❖ 観察された行為から推論された傾向性は暗黙の性格理論にしたがった他の傾向性の予測につながる

特徴②印象は機能的に構造化されている

- ❖ 印象形成過程は理詰めの抽象的行為ではなく、社会生活を難無くこなすための機能的な過程であり、そのため印象形成の過程はそれを行う観察者の目的に応じて異なる。
- ❖ 印象が実際とだいたい同じであるのは、リアリティの中に住み続けていたいという目的の表れ

特徴③印象は独立にはたらく

- ❖ 印象はしばしばその元となった行動とは別にはたらい、その後の判断や行動を導くようになる
- ❖ 印象の元となった行動が歪んでいるとわかった場合でも、一度形成された印象が保持されやすい
(Anderson, Lepper, & Ross, 1980; Ross, Lepper & Hubbard, 1975)

III-iii. Operating の特徴

心理学における無意識的な過程の重要性は自覚されていたが、心理学者はそれから目を背けていた

- フロイトの“無意識”:抽象的で自分の意志を持つ、人間をあやつるおぼけのようなもの
- 20世紀初めの行動主義:無意識の存在を否定し、全てを行動・意識的過程で説明
- 20世紀半ばの“無意識”:フロイトとは異なるスタンスで無意識的情報処理過程の存在を主張

無意識的な推論の特徴(Helmholtz, 1910/1925)①無自覚的②非意図的③努力は不必要④統制不可能
⇒自動的過程として受け継がれる(Bargh, 1989; see also Hasher & Zacks, 1979; Posner & Snyder, 1975;
Schneider & Shiffrin, 1977; Wegner & Bargh, 1998)

- ◆ Heider(1958) 帰属の法則は考えることなく使われることがあることを指摘していたが、理論に立脚したモデルはその逆を示唆(e.g., McArthur, 1972)
- ◆ Kelly 傾向性の推論と意識的な因果論法を同一視
(Hamilton, 1988; Hilton, Smith, & Kim, 1995; Langer, 1978; Zuckerman, 1989)。

III-iii-a. 自発性と自覚

他者の行為はその人の特徴に関する自発的に推論する(e.g., Pryor & Kriss, 1977; Smith & Miller, 1979, 1983; Winter & Uleman, 1984)

Winter, Uleman, & Cunniff(1985)

Tulving & Thomson (1973)の符号化特殊性原理を利用した実験で知見を実証

→自発的な特性推論は①本当に自発的なのか? ②本当に特性を推論しているのか? という疑問何を自発的か、何を特性とするかによって答えは異なる (①see Bassili & Smith, 1986; Uleman & Moskowitz, 1994; Whitney, Waring, Xzingmark, 1992 ②e.g., Carlston, Skowronski, 1994; Carlston, Skowronski & Sparks, 1995; Newman&Uleman, 1993; Uleman et al., 1993; Whitney, Davis& Waring, 1994)。明確な答えは出ていない

自発的特性推論に関する研究が OP 研究にもたらした貢献

- ①特性推論というフレーズの意味するものに対して、より思慮深く、説得力をもつ議論を可能にした
- ②特性推論が必ずしも熟慮の結果ではないことを示唆した

III-iii-b. 容易さ

1980年代末までに提出された様々な知見は、Gilbert たちによって整理された(Gilbert, Pelham, & Krull, 1988; Gilbert, Krull, & Pelham, 1988)

→ギルバートの3段階モデル

カテゴリー化と特性記述は自動的過程で、それを
経て初めて修正 = 意識的過程で論理法則に従っ
た帰属が行われる(e.g., Gilbert, Pelham, & Krull,
1988 不十分な調整効果)

III-iii-c. 必然性

Gilbert や Uleman の研究で、自動的な傾向性推論が

4つの特徴のうち3つをもつことがわかった。

Krull(1993)知りたいものが何であるか(状況/行為者)によって行為の観察は異なる特性記述につながる。

III-iv. 内容も問題となる

帰属: 観察者の推論の法則性を記述 社会的認知: 法則を実行する心的過程の流れと特徴を記述

共通点: 数式のように、どんな行動に対しても同じ過程、法則がはたらくとみなす←次第にそうではないと指摘

III-iv-a. 領域特定性

帰属は文脈の影響をうけることが指摘された(e.g., Weiner et al, 1971; Reeder & Brewer, 1979)

当時は一般的な理論には例外はつきもので、その場合だけ領域特定の帰属理論が適用されると説明

III-iv-b. tacit な表象

人間が“法則を知り、それに従う”とはどういうことか?

- ❖ 人は必ずしも正しい法則を使っているわけではなく、“領域特定の推論法則”などかわりに使っている
(Abelson & Lalljee, 1998; Hilton & Knibbs, 1988; Read, 1987; Smith & Miller, 1979)
- ❖ 法則は implicit, explicit, そして tacit のうちのどれかの方法で表象される(Denett, 1987)
 - explicit: 法則はシステムのどこか決まったところに物理的に貯蔵されたものとして実際に存在
 - implicit: explicit に貯蔵されたものの中に論理的に示唆される

- tacit: 経験を積むと、論理自体を理解していなくても、それに従った行動が取れるようになる
法則が explicit に表象されている場合には、人は法則を知ったり使ったりすることができる
しかし、法則が tacit に表象されている場合には、人は法則にただ従うだけ

III-v. 次なる伝統

社会的認知研究は、社会心理学のどの分野にも影響を及ぼしたが、最近是不備も指摘されている
ただし、何らかの新しい伝統が社会的認知研究に挑戦するには少なくとも以下の3つの障壁を破る必要

III-v-a. 手法

特性形容詞を読ませるとい手法は、形容詞が意味するものと正確に対応しない(Zajonc 1980a)し、実際に人を見て印象形成する過程とはずいぶん違っている(Barr et al., 1991; Pearson et al., 1984; Rayner & Pollastek, 1989; see also McArthur & Baron, 1983)。よって、一部の研究者の間で方法の適性が問題視されはじめる(Wyer & Gruenfeld, 1995)

科学的精密性を犠牲にするだけの価値があるのはいつか?

それによって規律が完全に崩れてしまうことがあるとするならそれはいつか?

.. この答えはいま考えられている最中であり、それが新しい伝統を形作ることとなるだろう

III-v-b. モデル

認知心理学は“陳腐な箱と矢印の絵(Fodor, 1983)”を捨てて認知神経科学へと転換。社会心理学は?

- ①そのまま箱と矢印を調べ続ける→認知心理学が直面した限界と同じものを経験する危険
- ②認知心理学に追従して脳の中を検証する→社会心理学消滅の恐れ。全ての研究が同じ方向になってしまう
- ③より伝統的な水準を見直す→ 一見負けを認めるような感じだが、立派な戦略で慎重な動きとなりうる
例. 社会的認知は認知心理学の危機の影響を受けたが、帰属理論は影響を受けていない
元いた場所に戻るだけでなく、螺旋階段のように、同じものをより高次の視点から見つめなおすことが可能

III-v-c. 併合

全ての OP を統一するような単一の言語や技術の基準が存在しない

ステレオタイプ化、印象形成、人物記憶などの各分野はそれぞれ独自の伝統を持っており、統一は難しい
各過程の相互の影響のしかたを調べることで、各過程の違いは些細なものであることがわかるかもしれない

IV. ICHHEISER の子供たち:OP におけるエラー

- ❖ 客観的アプローチによる対人判断の正確性の研究は論理的アプローチにとってかわられたが、人がどれだけ几帳面に推論法則に従うかということへの関心は社会心理学者の間にまだ残っていた
- ❖ 帰属理論や社会的認知から提示された諸モデルは、何らかの形で法則が発動することを示したが、いつも法則に従った判断ができるわけではない。失敗は様々な結果を生む(see Gilovich, 1991)

IV-i. OP におけるエラーの原因

論理的アプローチ: 推論の合理的基準と実際に行われている推論との比較、モデルによる合理的基準の呈示
→実際の推論は多くのエラー、幻想、失敗などを犯しがちであることが指摘され、研究が蓄積される
⇒Tversky & Kahneman,(1974), Nisbett & Ross (1980)による理論的基盤の呈示→研究として確立

☆推論のエラーは Allport (1961)の時代ですら“分類に耐えないほどの多さ”だったが、以下の4つの現象(唯心論、エゴティズム、現実主義、状況主義)から説明できることが指摘されている(see Gilovich, 1991)

IV-i-a. 唯心論(idealism) 自分の期待に添って物事を見る

Kant(1781/1965), Hegel(1807/1977)

知覚は生理的過程(世界を忠実に投影)ではなく、心理的過程(自分の持つ知識で世界を再表現)
⇒構造主義者の観点(Hundert, 1989) 知覚とは、古い知識が新しい知識と結合し、現実として経験される過程

知識が人間の知覚(判断、推論)に影響する方法

同化:過去の経験にしたがって世界を見る 対比:過去の経験との差を強調

- ❖ 同化は外界が自分の予想通りだったときに生じやすく、対比は明らかに異なっているときに生じやすい
(Parducci, 1965; Sherif & Hovland, 1961)
 - ❖ 構造主義者:同化を問題視、解決策を模索⇔心理学者:同化の効用を主張(Allport, 1954; Bruner, 1957)
ただし、実用的に考えると、同化効果が観察者のエラーにつながることも多いため、関連研究が累積
e.g., Lorge (1936) 話し手の威信によってコミュニケーションの誠実さの知覚が変わる
Kelly (1950) “冷たい”というラベリングによって、相手への好意が変わる
(see Fiske & Taylor, 1991; Taylor & Croker, 1981)
- ⇒観察者の期待が判断と無関連の場合や、ただ誤りである場合、同化効果がエラーにつながりやすい
e.g., 構成概念の活性化研究: Srull & Wyer (1979) Higgins, Rholes, & Jones (1977)
(see Higgins & Bargh, 1987; Smith, 1997; Wegner & Bargh, 1997, Wilson & Brekke, 1994)
e.g., ステレオタイプ研究(see Brewer & Brown, 1998; Deaux & LaFrance, 1998; Fiske, 1998)

☆同化効果は OP のエラーの元となりうる

IV-i-b. エゴティズム(egotism) 自分の希望に添って物事を見る

1950年代、ニューロク心理学の興隆 思考だけでなく知覚も価値観、需要、欲望の影響を受ける

e.g., 脅威に思っているものは見落としやすい(Postman, Bruner, & McGinnies, 1948)

- ❖ 実験心理学者: 刺激知覚など低次の過程を扱う。価値観、需要などでは知覚は理解できない
刺激を知覚する前に、それが脅威的だと分かるのはなぜ? ←ニューロクの知覚的防衛を批判
※当時はモジュラー的な情報処理モデルが提唱されていなかった(e.g., Fodor, 1983; Zajonc, 1980b)
中心的概念であった知覚的防衛、警戒という概念への批判(e.g., Goldiamond, 1958) ⇒興隆せず
- ❖ 社会心理学者: 実験心理学者よりも高次の過程を扱う。これらに暖かい構成概念が影響することは自明
⇒主張に従った知見が多く提出される(see Ross & Fletcher, 1985)

1960年代、ニューロクから認知心理学へ 社会心理学には優れた説明の定義を与えるという貢献

よい説明とは? 心的過程の流れや特徴を記述することによって、現象を説明する(欲求を満たしたいから)

社会心理学への適用(Jones & Nisbett, 1971; Nisbett & Ross, 1980)

- ❖ 動機は現実にあって重要なものだが、誤った推論の説明としては安易
- ❖ エラーを通常に機能したシステムから偶然生じた副産物として考えることを主張
例. 失敗を成功よりも状況に帰属するのはなぜか? (see Miler & Ross, 1975)
伝統的見解: 精神分析的な考え方に適うような、自己高揚的な考えがはたらいたから
認知的見解: 失敗は予想外であり、予想外の出来事は一般的に状況に目を向けさせやすいから
- ❖ 伝統的見解では、自己中心的バイアスは自己欺瞞の結果(honest でない)。認知的見解では、自己中心的バイアスは過程の結果であって、自己欺瞞ではない(honest な結果)
- ❖ それぞれの見解から、自分の主張にあう研究結果が出された(e.g., Storms, 1973; Taylor & Fiske, 1975; Ross & Sincoly, 1979)が、決定打がないために、決着はついていない。
- ❖ 認知的見解は、バイアスを処理過程の不備から説明するが、自己高揚的な結果をもたらすからそのような不備を持つという議論も可能(Taylor & Brown, 1988; see also Buss & Kenrick, 1998)→二つは相補的

☆どちらにしても、需要、欲求欲望、願いなどが対人判断のエラーの元の一つとなっていることは確か

IV-i-c. 現実主義(realism) 自分は物事があるがまに見ていると考える

唯心論者: 目に映る世界は心が外界を解釈した結果であって、真実の姿ではない

⇔実際は、なんらかの現実主義をもって行動をとっていることは明らか 例. 美容師は髪を切る

現実主義者: 世界はあるがまに見えるはずで、見かけと実際の違いを騒ぐことにはあまり意味がないと主張

(Locke, 1690/1959; Reid, 1795/1983)

- ❖ 現実主義者であること=見かけと実際の違いの存在を否定、見過ごしがち(Ayer, 1956)
⇒主観的経験に心(唯心論、エゴティズム)が及ぼす影響を無視しがち

e.g., Gilbert & Osborne (1989)

行為者は内気という偽の情報を流した後、ある条件の参加者にはインタビューを聞かせた。その後、情報は偽だったと伝えた⇒インタビューを聞いた参加者は、行為者に関する信念を訂正しなかった(“情報は偽かもしれないが、インタビューでは実際内気そうだった”)

- ❖ この傾向は社会心理学で指摘されている多くの現象の元になっていると考えられる(see Dunning et al., 1990; Griffin, Dunning & Ross, 1990; Griffin & Ross, 1991; Jacoby, Lindsay, & Toth, 1992)
- ❖ 人は現実主義に傾倒しているとはいえ、唯心論、エゴティズムの影響を全く考慮できないわけではない
人によって物の見方が異なるという格言は甚にあふれている
Piaget の認知の発展に関する研究
対象の知覚は対象自身の特徴だけによって決まると考えている(egocentrism≡現実主義)
↓ 発達
社会的な相互作用から生じる合意性情報の利用(Flavell, 1963)
↓
徐々に現実主義を越えたものの見方(socialized thought)が可能になる
※子供が育った後も現実主義は消えてなくなるわけではなく、影響を及ぼし続ける。現実主義の
とった結論が、その後に修正されるようになっているだけ(Gilbert & Gill, 1996; see Guilbert, 1991)

☆思考は物事をあらわし損なうことがあり、人がそのことに気が付かない場合には、エラーが生じる

IV-i-d. 状況主義(circumstantialism) 自分が目にするものことだけを考える

- ❖ 唯心論、エゴティズム、現実主義の影響を避けられたとしても、見えるもの全てを見ているとは限らない
- ❖ 科学者は標本を観察して母集団の傾向を推定するが、それは厳密なサンプリングの法則に従ったもの
- ❖ しかし、対人判断では観察者がたまたま目にしている情報が強調されやすく、状況の予期せぬ変化の影響にさらされていることが多くの研究で指摘される(see Gilovich, 1991)
 - ◆ 視界で優位を占めている者が相互作用を支配していると思われやすい(see Taylor & Fiske, 1978)
→目立たない情報が使われない(顕現性バイアス)
 - ◆ いやな気分ときには、気分に応じた記憶が検索されやすい(see Forgas, 1995)
→記憶に貯蔵されているが、アクティブでないものは使われない(接近可能性バイアス)
 - ◆ 特定の行動を導く状況にいても、対応する傾向性をもつと思われやすい(Gilbert & Malone, 1995)
→入手可能な情報を見ていない(対応バイアス)
- ❖ 人は機会を与えられれば適当な情報を見つけることができる(Trope & Bassock, 1982)
- ❖ しかし、日常生活では自分が利用したい情報だけを目にすることができる機会はめったにない。その場合、人は必要な情報を求めるよりは、その場で提供された情報だけを使用して判断を行う。

☆手頃な情報だけに頼って判断を行う傾向は、OP で生じるエラーの主要な発生源である

IV-i-e. 分子的・原始的な諸エラー

- ❖ OP におけるエラーはたくさん指摘されているが、上記の 4 つの組み合わせによって説明が可能
例.新規情報への抵抗(既存知識への固執)(Fiske&Taylor,1991; Greenwald,1980; Kruglanski&Webster,1996)
唯心論的説明:既存の知識が期待となって、新規情報の重要性を過少視させている
エゴティズム的説明:新規情報の採択は自分の失敗を認めることとなり、不安、無力感、愚かさにつながる
現実主義的説明:自分の既存の知識は唯心論、エゴティズムの影響を受けているはずはないから
状況主義的説明:手元にある既存知識に有利な証拠を考慮し、手元のない不利な証拠を考慮できない
複雑に見えるエラーも実は単純なエラーの組み合わせとして考えることが可能(e.g., Higgins, 1997, Vorauer & Ross, 1993)といわれている。しかし、どれくらいのエラーが説明できるかはまだ検討の余地がある

☆OP におけるエラーの研究は上記のように原子的レベルから分子レベルの情報の説明を行うことから始まったのではなく、複数のエラーの輪郭をたどることからでもなく、社会心理学的に最も重要な現象の記述を行った一人の研究者の観察から始まった..

V. OP における基本的エラー

Gustav Ichheiser ポーランド人。帰属理論、エラー研究が発展する 20 年前にその存在を経験から指摘したが、適当なアカデミックな地位につくことに失敗したため、理論は陽の目を見ることがなかった

V-o-a. Ichheiser の考えの中心

①推論の過程で生じる誤りはたった一つのエラーが原因(Ichheiser, 1943)

- ❖ 一般的な行為者には行動を調整したりしなかったりする傾向性をもっていて(表現過程)、観察者がその行動から傾向性を推論する試み(印象過程)は、成功と失敗が混ざったものになっている
- ❖ 行動は傾向性と状況の結合した結果だが、他者の行動を解釈する際には、特定の社会状況ではなく、特定のパーソナリティによる説明が行われる(帰属理論で言うなら、割引原理が使われないということ)
- ❖ この誤りがなぜ生じるのかについて、Ichheiser は以下の 2 つの答えを提供

②基本的なエラーはイデオロギーに起因する(Ichheiser, 1943)

- ❖ 人々には、“他者の知覚を歪ませるように勝手に働く誤解釈のメカニズム”を持っている
- ❖ この傾向はフロイトの防衛機構とは異なるもので、壊れやすい自我を甘やかすものではなく、頑強な文化的な神話(cultural myth)、“19 世紀の社会システムとイデオロギーの結果”である
- ❖ ある人には富を、ある人には困難をもたらすような社会では、結果を傾向性に帰属するような傾向は、現状の正当化につながり、階級主義社会の持続にも貢献する(see Nisbett, 1987; Weber, 1930)

③基本的なエラーは不可視性(invisibility)によって持続する(Ichheiser, 1943)

- ❖ 社会のイデオロギーの影響を考慮しないとしても、状況要因を検出することは困難
- ❖ 状況的な証拠として考えられる要因は、行為の最中に明らかになることはないため、観察者の注目を集めないことが多い 例.観察者の存在自体が影響していても、観察者は自分がいない状況を見られない
- ❖ 貧困、人種差別、失業などの状況要因は不可視性をもつため、軽視されやすい
- ❖ 人が割引原理を適用することができないのは、誤った信念を教え込まれていたり、そのような信念を破るような証拠が現れにくいことが原因だと考えた。

⇒個人ではなく、社会生活と物理的なリアリティが状況要因を見過ごさせていると考えた。

④基本的なエラーは自動的に生じる

- ❖ 傾向性の推論は自動的に過程であるため、割引理論を使うことが妥当だとわかっているような状況でも、それが使われずに、傾向性が推論されてしまう
- ❖ “意識的な解釈が無意識的なメカニズムによって行われたパーソナリティの解釈に修正を与えることは稀”
⇨Heider の理論(帰属過程は大体暗黙的)
- ❖ そのような暗黙的な傾向性の帰属は、問題についてより知識を得たとしても、まず先んじて行われる
- ❖ 帰属過程は意識的過程と自動的過程のコンビネーションであるため、基本的エラーは訂正を免れがち

V-o-b. 観察者バイアス Ichheiser の知見は後に Asch, Heider の後継者たちによって再発見される

Jones & Davis (1965)

行動が状況規範によって引き起こされているときには、行為者の意図は曖昧なので、その行動は傾向性に帰属されるべきではない →Kelly(1976)の割引原理提唱につながる

Jones & Harris(1967)

カストロ擁護を指示された(とわかっている)エッセイを読んでも、割引原理が適用されずに、その人が実際にカストロを支持していると考えられた

- ❖ この結果の理由はいくつも考えられるが、大事なのはこの結果が帰属法則が使われなかったことを示しているわけではないということ 指示をうけた人は自発的に書いた人よりは、カストロを支持していないとされた
- ❖ つまり、帰属に関するエラーは、帰属の法則に従った行動の代わりに生じるのではなく、帰属の法則に従った行動に加えて生じる。このような偏向は、観察者バイアスと呼ばれる(Jones & Harris, 1967)
- ❖ Jones 達は、バイアスの原因として考えられる要因を潰していく研究を行ったが、その結果、何がバイアスを生じさせるのか、ではなく、何がバイアスを生じさせないのかゲームのように指摘されるだけになった

V-o-c. 基本的帰属のエラー 観察者バイアスの意義について

Ross(1977)

- ❖ バイアスは社会心理学で取り上げられている現象を成立させている事実で、フィクションではない
例. Counterattitudinal advocacy effect(態度に反する議論をした後、議論の方向に態度変化する) 合理化の結果(Festinger & Carlsmith, 1959)か、それとも帰属の問題(Bem, 1967)か? →帰属の問題。しかし、帰属の法則に従っていれば生じないはず。観察者バイアスが原因
- ❖ 状況要因の軽視は社会心理学における第一の原理。過去の研究をその観点から見直すことを重要視
例. ミルグラムの服従実験
本人の傾向性ではなく状況が、その人の行動を決定することがあることを示唆
一般的には、行動(同調、援助)を決定するのは本人の性格だと考えられているため、衝撃的
- ❖ 心理学者も一般人も同じように行動に関する誤った直感を抱いているが、心理学者はそのことを自覚し、癒し、利用することができる
- ❖ Ross による観察者バイアスの指摘は社会心理学者の存在意義や科学そのものを正当化

V-o-d. 対応バイアス

90年代には、推論エラーの4つの原因(唯心論、状況主義、エゴティズム、現実主義)からバイアスが説明される

①エゴティズム

- ❖ 傾向性の推論によって、他者の行動予測、自分の運勢支配が可能だと思えることができる(Heider, 1958)
- ❖ 人が偏った推論を行うのは、怠け者だからではなく、自分の置かれている環境を把握するため
e.g., Miller, Norman, & Wright (1978) 他者を知る必要性がピークにあるとき、対応バイアスは強まる
→人は望んだときに対応バイアスを生じさせることが出来る(see Webster, 1993)
- ❖ もちろん、傾向性の推論がいつも状況要因の考慮より有利な情報を与えるわけではない
☆ある状況では、傾向性の推論のほうが情報を多くもたらす。その場合にはエゴティズムによる説明が適当

②状況主義

- ❖ Heider は状況要因の見えにくさが対応バイアスの原因であることを強調
- ❖ 行為を導く原因となった状況要因が、行為の際には取り除かれている場合もある
- ❖ 状況要因が観察者の目の前に現れず、観察者自身もそれを見通せない場合、対応バイアスが生じる
Ross, Amabile, & Steinmetz(1977) 選手の有利な状況を考慮せず、その選手を能力があると判断しがち
- ❖ 状況主義は獲得できる情報の欠如だけでなく、獲得してはいても気がつかない場合も含む
- ❖ Gilbert, Pelham, & Krull (1998)モデルから考えると、傾向性の推論を修正して対応バイアスを防ぐためには、観察者は思い出せていない情報を検索、考慮しなくてはならない

☆状況主義を乗り越えることは難しく、対応バイアスは防ぎにくい

③唯心論

- ❖ 状況が制限されると自分が予測していたものが見える(Heider, 1958)例. パーティーでは笑顔が目につく
Kelly (1970) 行為者の行動と観察者の状況基盤の予測との同化が、行為を傾向性に帰属する原因となる
Jones, Davis, & Gergen (1961)同じ行動を見ていても、それが同じ行動として目に映っているとは限らない
※ただし、被験者間要因での実験では、割引原理を適用するのは困難(Kelly, 1970)
Trope (1960)のモデルからも、行為者の行動と観察者の予測がどのように同化されるかがわかる
- ❖ 割引原理として働くはずの状況要因が、行為者の行動との同化により相殺される
例. 歯医者で待っている患者
“歯を抜かれるために待っているのは誰でも不安だろう”→“やっぱり彼女も不安に見える”
→“あそこまで不安がるということは、彼女は心配性に違いない”
- ❖ 行為者の置かれている状況に関する知識が、傾向性の推論を強めてしまう場合がある(Snyder, & Frankel, 1976; Trope & Cohen, 1989; Trope, Cohen, & Maoz, 1988)

☆割引原理を使おうとしても、行為が状況基盤の予測と同化されるときには、対応バイアスが生じやすい

④現実主義

Reid (1974/1983), Heider (1958) 観察者は自分の推論プロセスを自覚している

→その後の研究で、プロセスの一部は意識外で生じており、他者の傾向性は“推論される”のではなく、“見える”もので、心理過程と現実とが同一視されていることがわかる

❖ この現実主義は、二つのやりかたで対応バイアスを引き起こす

①行為者の行動を解釈しそこなった可能性を考慮することを観察者が怠ったために、バイアスが生じる

②行為者の状況を解釈しそこなった可能性を考慮することを観察者が怠ったために、バイアスが生じる

※状況自体が直接行為を引き起こすことは稀で、何らかの行動をとるよう心理的制約を与えることの方が多

❖ 自分が状況を解釈していることにすら気づかない→自分と行為者の状況解釈が異なることは理解不可能

例. クイズ番組で解答者が簡単な問題に間違える→“あいつはバカだ”テレビと自宅の違いを考慮せず

Sherman (1980) 反態度的エッセイを書く承諾率予測は47%→実際は誰も拒否しない

☆行為者の置かれた状況を理解できない現実主義の予測者は、対応バイアスで歪んだ推論を行うしかない

V-i. 純粋エラー批判

対応バイアスの研究が進む一方で、その意義が問われ始める

“基本的帰属のエラーはどこまで基本的なのか？”(Harvey, Town, & Yarkin, 1981)など ⇒論争に

推論のエラーとは？論理的アプローチの答え:論理基準に反しているとき ⇒以下の3つの側面から批判

V-i.a. 基準批判 論理的な法則は判断基準ではないので、それに反してもエラーとはいえない

ポストモダニズムからみた推論エラー:恣意的基準から外れたに過ぎない→推論。誤りでも悪でもない。

割引原理を適用することが最も正しいとは限らない。(see Gergen, 1990; Sampson, 1991)。

❖ ポストモダニズムは、社会心理学者が論理的と決めた判断基準に疑問を投げかけている点で有意味だが、

どんな証拠も否定するため、反証を出せない どんなルールも受け入れない人とテニスの試合はできない

⇒社会心理学ではポストモダニズム的批判を退けている

V-i.b. 一般化可能性批判 エラーは、それを再現するための人工的な状況以外では生じない

Aschの実験パラダイムはシンプルで安上がりなどの利点があり、一気に広まったが、判断だけに焦点を当てたため、その手法に批判が寄せられた

①新ギブソニアン的見解(Gibson, 1979)

現実場面は必ず文脈の影響を受けるため、その場面以外で見られた反応が実際に見られるとは限らない。

McArthur & Baron (1983)

実験で使われている刺激は貧弱で非選択的、参加者の情報選択行動は非常に制約を受けている

⇒人が推論の才能を発揮できないような状況で実験しているため、推論に悲観的な見方しかできない

②新ブランズウィック見解

最近になって客観的アプローチの復権が起きている

Kenny (1994)の social relation model 人々の互いの印象、自分の印象、相手から見た自分の印象の一致を、Cronbach (1995)に指摘された統計上の問題を避けて検討する

Funder (1995)の realistic accuracy model 判断過程と判断対象を同時に検討できる枠組みを提供

❖ どちらの枠組みも、実験室で得られた推論エラーの一般化可能性を実証的に検討する必要があると主張

❖ 特に、実験室内で許可された推論法則を使用する手がかかりが、現実場面で実際に使用できることが稀なとき、この問題は強制的に沸いて出る

例. 傾向性と状況の独立性 実験室では二つは独立だが、二つに因果関係がある場合は多い

③多文化的見解 ここまでの知見は主に北米の白人大学生に対して行われた研究の結果にすぎない

❖ エラーが他集団でも生じるかを検討するべき(Markus&Kitayama, 1991; Newman, 1993; Smith&Bond, 1994)

❖ 文化によって違いが生じるという研究(e.g., Morris & Peng, 1994; Lee, Hallahan, & Herzog, 1996)もあるが、対応バイアスに関しては、同じように生じるという研究もある(e.g., Toyama, 1990; Krull et al., 1996)

- ❖ 文化によって心理メカニズムが異なるという知見の結論は研究の蓄積を待つ必要があるが、一つの文化圏での結果が全てではないことを示唆している

④アーティファクトの価値

- ❖ 実験室実験と現実場面の適当なバランスをとりなおすことで一般性に関する批判の解決が試みられている(see Aronson, Wilson, & Brewer, 1998)
- ❖ 実験研究はなぜエラーが生じるかを示し、フィールド研究はエラーが生じるかを検討する。どちらも重要

V-i-c. 結果の重要性批判 エラーを起こしても大して困らないし、利益がある場合もある

William James (1980) のプラグマティズム 役に立つものこそが真実である

心理学をプラグマティズムの観点から考えると、行動のために考えるのであれば、行動が正しい場合は考えも正しい。必ずしも数学者、論理学者達の考えだけが正しいとは言えない。

橋を作る人が宇宙は線形で固定的だと考えて振舞ったとしても、その人が作る橋はしっかりしたもの

- ❖ 推論のエラーは困った結果をうまないこともあるし、利益をもたらす場合もあるため、エラーとは呼べない
- ❖ 日常生活では行為者の傾向性と状況が独立でない場合が多いので、あまり問題ではない。一般的な正しさよりも自分にとっての正しさ、正確さよりも目的に合うかが重要(Swann, 1984)
- ❖ true という言葉は論理的正しさと実用的正しさのどちらを指すかが問題となっている
- ❖ 論理基準に反することを noncanonical、目的に合わないことを maladaptive と呼べば、解決可能

V-ii. エラーの展望

人々の推論は不完全であり、エラーが生じる。しかし、それはどのくらい深刻なのか？

- ❖ エラーは必ず生じるとは限らない。少ない情報から相手を正しく判断できることも、多くの現実場面の研究で明らかになっている(Albright, Kenny & Malloy, 1988; Ambady & Rosenthal, 1992, 1993; Funder & Colvin, 1988; Paunonen, 1991; Watson, 1989)。
- ❖ どちらが真実なのかは、状況によって様々である。その文脈を調べることが研究の目的となる
- ❖ 推論エラーは基準からのランダムなずれではなく、ある文脈では働く過程がある文脈では働かないことから生じている。
- ❖ 人間の脳は哲学や物理のために発展したわけではなく、食べ物を探したり、子供を作って育てるために発展した。外界の急激な発展に脳がついていっていないためにエラーが生じているのかもしれない。

VI. 我々の子供たち:OP の今後

This chapter has dwelt on history more than most.

OP の今後

様々な問いが投げかけられていて、今はまだ検討途中である

論理的アプローチの向こうには何があるか？

社会的認知の伝統から生じてきた方法論的、理論的な問題はどのようにして解決できるか？

Asch や Brunswick や Heider とその継承者達が明らかにした知見は、今後の研究の基盤となるのか、それとも、新しい研究の前触れとして軽く触れられるにとどまるようになるのか？